

「消化管の病理と生検組織診断」

中 村 恭 一 筑波大学教授 著
喜 納 勇 浜松医科大学教授

愛知県がんセンター研究所所長
長 与 健 夫

消化管疾患の診断にとって、生検組織診が必要欠くべからざるものになってから既に相当の年月が経つ。わが国のみならず世界中のどの国においても、この方法が日常の診療に際していかに有用なものであるかを誰でも良く知っているし、この方面の診療に携わる人々はそのことを肌身に感じ取っている。

しかし、物事には常に表と裏の二面性があるように、生検についてもそのプラスの面だけを強調するのは事実を正確に伝えることにはならない。それが有効、適切であるためには、診断を下すのに必要と思われる所から最小限の組織片が採取されなければならないことは勿論であるが、その条件が満たされていたとしても、肝心の生検標本をみる人の目が曇っていたり、やぶにらみであったりすると、かえってX線や内視鏡で正しくみていたものを誤診に導く

因にもなりかねないマイナスの面をもっていることも忘れてはなるまい。また、この方法が有効でない消化管疾患も少なくないし、技術的な問題が介在する場合もある。

生検標本の組織検査をルチーン・ワークとしている人々は、どのような標本に出逢おうとも、正確な診断をし、また正しい判断をするよう常日頃心がけているわけであるが、多くの標本の中には“どのように読んだらよいかわからない”とか“まず悪性の変化だとは思いますが、自信をもってそうは言い切れない”“異型的な再生上皮のようだが、癌の可能性も否定できない”などの疑いをもたせるものもあり、従来の外科材料を主にした病理組織に関する文献、単行本や教科書には「ここが知りたい」と思うことが触れられていないという経験をお持ちの方も少なくないように思う。

本書はその点、理論を強調するものではなく、またアトラスに終始するものでもなく、両教授が多年にわたって集積した多くの資料の中から、実際の検索にあたる人々の手引きになるように、細心の注意をはらって、食道から肛門にいたる消化管のもろもろの疾患のすべてにわたって、各ページに鮮明な生検組織写真を盛り込んで、それらに適切な解説を加えている。また、生検標本からその切除材料の肉眼写真、さらにその病変部分の組織写真の弱拡大から強拡大へと、目で追うだけでもその症例のポイントが掴めるように配慮されているのも、読者にとっては大変有難いことだ。

消化管の病理に興味と関心をお持ちの方にはばかりでなく、学生諸君にも是非お推めしたい本である。

B 5 頁346 図22 写真465 原色図24
1980 年 ¥15,000 千300 <医学書院刊>